

Title	イスラムの社会思想, 斎藤栄三郎著, 明玄書房発行
Sub Title	E. Saito, Social thought of Islam
Author	渡辺, 宏(Watanabe, Hiroshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.4 (1963. 12) ,p.110(530)- 113(533)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19631200-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イスラムの社会思想

斎藤栄三郎著
明玄書房発行

渡 辺 宏

われわれは先学が苦心労作されたイスラムについてのすぐれた概説書をすでにいくつか持つているが、それらは宗教面の解说不いしは歴史的発展の叙述に力が注がれているか或は時事的問題の解明に関するものが多く、イスラムの社会面を専ら説いたものは乏しかった。しかし最近のイスラム研究は洋の東西を問わず税制や土地問題などの究明に関心が向いているようなので、この分野の基準的な概説書の出現が大いに望まれていた。

著者 斎藤栄三郎氏は第二次バルカン戦争のあつた大正二年東京に生れ、早稲田大学商学部を卒業後報道界に入り現在もラジオ、テレビで解説に活躍する一方、学界における研鑽も著るしく商学博士並びに法学博士の両学位を帯びた有能の士である。博士がイスラム研究に着手されたのは昭和十五年(1940)新聞記者として中国の上海に駐在した折からで、爾来二十有余年倦むことなく文字通り内外万巻の書を読破すると共に、東南アジアその他の各地を踏破して実地にイスラムを研究されて来た。従来わが国のイスラム研究は歴史・宗教・哲学・美術など人文科学分野の学徒が主体をなし、しかもその殆んどが現地を見知らぬ者であつたので、すでに社会科学の分野で幾多不滅の業

績を有する博士が、体得した実態を織込んでイスラムの社会思想研究を発表されたことは誠に大慶の極みである。

本書の構成は(一)イスラムの成立^七(二)イスラムの政治思想^{十四}(三)イスラムの経済思想^{十五}(四)イスラム法^十(五)イスラムの文化思想^七の五章に分れ、巻末に年表・系譜・参考書目・索引などを附し、全巻書きおろし八八〇頁に及ぶ大冊である。

さて第一章「イスラムの成立」p. 35—88はイスラムの成立過程を概観し、その特質を究めんとするもので、本書の序説に相当する。第一節「イスラムの意義」は語意を述べて俗にモハメダン或はモハメダニズムと呼ぶことの非なるを説き、イスラムの本義は完全平和にあると結論する。イスラムが仏教語の「南無」に等しいと喝破されたのは、ともすれば専門に心を奪われて狭い分野にとりこもりがちな吾々にとり全く目のさめるような啓示で、早くも博士の広い視野と豊かな学殖に打たれた思いがする。第二節「マホメットの出現」^五はアラビアの氣候風土から説いて如何なる雰囲気よりマホメットが生れ、育ったかを述べ、彼の家庭人・宗教家・政治家としての生涯を寸描する。第三節「ユダヤ教のイスラムに及ぼせる影響」^四はユダヤ教に酷似する戒律や行事がイスラムに多いところから両者に共通点が多いことを指摘したもので、第四節「キリスト教のイスラムに及ぼせる影響」^五は博愛の精神、復活の教義と政教一致

の体制を除いては共通するところ少く、かえつて積極性、現実性、寛容性などキリスト教とは逆な面にイスラム教の特質があると論ずる。第五節「イスラム經典の編纂」^三はコーラン結集の事情からスンナ、ハディースまでを解説する。第六節「イスラムの本質」^五はセム族の神觀念に始つてイスラムの哲學的基礎に及ぶもので、人間の本性は弱いが善惡を區別する能力を持つ故にイスラムの精神は性善の説であるとの結論はよくその本質を示している。第七節「イスラムの信仰」^六は教徒の信心と勤行及び宗派までを説いたもので、イスラムは実践の宗教であり、実行を尊ぶものであることが如実に示されている。

第二章「イスラムの政治思想」pp. 88—150 はイスラムの歴史的発展を全地域全時代にわたつて詳細に俯瞰し、その底に流れる政治思想を究明せんとするもので、高名なイスラム教徒の歴史学者アメール・アリー『サラセン小史』(AMEER ALI: A History of the Saracens など)から様ざまな史実を引用している。この章で注目すべき点は第一乃至第六節でマホメット以下諸カリフの社会・經濟政策を詳細かつ具体的に示されたこと、第七乃至第十三節でスペインから日本までの各地域におけるイスラムの発展をその伝来から今日の状態まで多くの資料によつて克明に描かれたこと、またヨーロッパの地名にあらわれたイスラム色やニザーム・アルムルクの行政学或はオランダのインドネシアにおけるイスラム政策更には日本におけるイス

ラムについて他書には見られない研究が述べられていることである。この一書をなすほどの膨大な精密な論考を博士は謙虚にも最少限度の考察と称せられるが、モスクの建築から幾十百人のスルタンの性格更には石油問題まで殆んどイスラム圏における過去現在の一切にわたる事象に説明を与えられていることは全く例のないことで、次章以下とも相いまつて淺学な吾々には極めて重宝な知識の源泉である。第十四節「イスラムの發展と停滯」^八は本章の結論をなすもので、發展した原因は教義が單純素朴で実践的であり、民族運動の形をとつたこと、奴隸解放など進歩的な思想を持ち、巧妙な占領地統治策を行つたことなどの諸点に求められるが、時と共に宗教の形式化が進むにつれて人心が萎縮し一方では膨張する西洋キリスト教世界が、新航路の発見以後特にナポレオンのエジプト遠征より經濟的政治的に急速に侵略して資本主義諸國の植民地化した、今やイスラム教はコーランの民主主義の精神に還るべきであると同時に、イスラム教義の近代化を進めることが必要になつてゐると云う。

第三章「イスラムの經濟思想」pp. 151—594 は經濟が社会組織の根本であり、經濟こそ社会思想を決定するものであるとの觀點に立つて、マホメット生存當時のメッカ經濟から現在直面する中近東の經濟とその開發までを論ずる。イスラム特有の金錢觀、奴隸制度、貿易状態や海賊の活躍など多くのことについて記されているが、この章で最も興味を引くのは第十二節

「イブン・バツータの旅行記に現れた経済地理」^{十三}と第十三節「イブン・ハルドウーンの経済思想」^{十七}であろう。前者はアフリカからシナにまで足跡を及ぼした偉大な旅行家イブン・バツータの旅行記 *IBN BATTUTA: Travels in Asia and Africa, translated and selected by H. A. R. Gibb* から第十四世紀におけるアジアの政治経済、文化を物語る貴重な資料を抽出されたもので、関税について、青年団について、飛脚について地方々々の実状が明示されている。後者はアリストテレスからマキアベリに至る間の社会科学における最高峰であるイブン・ハルドウーンの業績を彼の不朽の名著『世界史入門』*IBN KHALDUN: Muqaddimah, translated by F. ROSENTHAL* によって示したもので、近代経済学の泰斗アダム・スミスより遙かに早く労働価値説を主張したこと、富の社会的性格を明らかにしたこと、ジャン・ジャック・ルソーに先んじて契約思想を語ったことなどを述べて独創的思想家で社会の進歩を確信し社会革命を信奉した偉大な人物であると結論する。今日ではこの両イスラム教徒の名は大体知られているが、その内容についてはマルコポーロやマルクスの百分の一にも及んでいない。大部でしかも難解な両書からかくも見事にその特色を浮びりされた博士の功績は誠に大である。

第四章「イスラム法」p. 595—756 は著名な法学者マジュド・

ハッドウリーの最新の書『イスラムの戦時法と平時法』*MAJID KHADDURI: War and Peace in the Law of Islam* などに拠つてイスラム法の基本概念から実際面までを述べたもので、イスラム教徒と接触する際最も必要な知識が博士の豊かな学殖によつて平易に説かれている。泥棒は正しい信者のいとなみをさまたげる者ゆえジハードの対象として異教徒に対する戦争と等しく戦時国際法が適用されることなど多くの読者に初耳であろう。イスラム法では曖昧な国家の法律的基础について明確に定義されたこと、現在のイスラム諸国では本来のイスラム法と各国の慣習及び主権者の意思に基く法律との二体系が存在することやローマ法の影響が存在することなどを論じられたことは法学博士たる著者の真髓を遺憾なく現わしたものである。

第五章「イスラムの文化思想」p. 757—852 はサラセン文化はギリシャ文化の上に輝かしい花を咲かせたものであり、またアラビア語に翻訳されたギリシャ文献がやがてラテン語に重訳されて西欧文化に大きな影響を与えたという世界的な見地からイスラム文化の発展を把握したもので、本書の終章をなす。後半の三節は「イスラムの異教徒対策」「アラビアン・ナイトに現れたイスラム思想」「日常生活」の題で今まで誰もなし得なかつたサラセン世界のエキセントリックな生活をヴィヴィッドに描いてあますところがない。幾百年前の古書に息吹を与え、イスラムの文化的価値を如実に示すことは長らくジャ

ーナリストとして活躍された博士のみが能くなしうることである。

紙面に限りがある上に浅学の身ゆえ博士の膨大な論旨をじゅうぶんに述べることは出来ないのは遺憾であるが、イスラムの真の姿は、平和の宗教である。ゆえに今後もイスラムは人類と共に発展するであろうという本書の結論は斎藤博士二十有余年の机上・実地にわたる深く広いイスラム研究の結晶である。

わが国のイスラム研究は第十八世紀初頭の新井白石を鼻祖に、明治に入つてはタウンゼント訳註永峰秀樹重訳の『開卷驚奇暴夜物語ものがたり』1875 ハンフリー・プリドウ著林董訳補『馬哈默伝』1876 など洋書の翻訳から始まり、第二十世紀に入つてようやく学術的な研究に着手された如くで、社会思想の研究などまだまだ先のことであろうと思われていた。この秋にあたつて博士が文字通り学界空前の八八〇頁に及ぶ大著を発表されたことは古い伝統を持つ西洋のイスラム学でも未だ及ばない大事を成しとげられたもので、誠によろこばしい限りである。今後博士が得意とせられる専門の分野において更に第二、第三の巨弾を放つて学界に輝きをまされんことを切に期待する次第である。

昭和三十九年四月五日発行

八八〇頁 定価二千八百円

批評と紹介

執筆者紹介

前嶋	信次	慶応義塾大学文学部教授
伊藤	清司	同 専任講師
米田	治	同 専任講師
高橋	琢二	同 塾監局教務部勤務
太田	次男	同 附属研究所 斯道文庫専任講師
渡辺	宏	郁文館高校教諭